

て、是等を綜括して本古墳營造の實年代の西曆五六紀の間にあること、内に示現せらるゝ文化及び技術を説けり。今ま如上の記述を通覽するに第一部の遺物記載編に於いて、いたく破碎せる銅片を接合して寶冠、魚佩、沓等の珍奇なる裝身具を復原せる處、鹿角製刀飾りの着裝の原形を保てるもの、紹介と共に興味を惹くのみならず考證編にありて地籍圖の示す事實よりして現形の丸き本墳がもこ前方後同墳なりしことを考定せるは主要遺物の性質に關する研究の精彩なるこ併せ見る可し。また遺跡の年代觀は考古學上の研究よりする此の種論證の範を示せるものこ云ふも決して過言に非ざる可し。本古墳は副葬品の豊富なる點に於いて肥後の江田古墳に比すべし。従つて其の詳細なる紹介は學界に研究上の基準を與ふるものこして重要視す可きなり。今ま本書に依りて事實の忠實なる紹介と共に右に關聯せる研究の成果を知り得るを欣ぶ。別に末尾に金製耳飾、環頭太刀及鹿角製裝刀具の聚成圖及一覽表を附す。本文の遺物研究を併せ見るべきものなり。(岩波書店發賣五・〇〇)(梅原)

彙 報

第一號 一五八 (一五八)

●京都帝國大學文學部史學科研究旅行

昨年廿三日同廿四日の兩日を利用して、三浦教授中村講師及び天沼工學部教授の指導の下に古文書記錄建築彫刻等の實地研究の爲め、河内金剛寺及び觀心寺に旅行を企つ。一行十一名、廿三日午前八時四十分京都驛を發し、大阪を経て十一時過長野着、五十町を徒歩して先づ眞言宗御室派の巨剎にして南朝史に名高き天野山金剛寺に到る。住職會我部俊雄師の好意によつて觀養院跡に増築せられし寢殿に於て賴朝の書狀、楠木氏文書、覺阿淨覺の訴訟書類、信長秀吉家康等の文書等數百點を仔細に閱覽したりしが、就中南朝の宸翰、楠氏三代の筆蹟は云はずもあれ、秀吉の書狀に見ゆる灰汁を入れざる酒所望の文句、禪惠上人の寫經、筆錄等の跋語に見ゆる建武正平間の斷片的日記等は特に興味深く、夜に至りて筆寫する者多かりき。

當寺は度々兵燹に罹り現存の堂宇は大部分慶長十一年豊臣秀頼の再建に係る、而もその間仔細に點檢すれば寺傳と異なる時代の手法意匠の存するを發見して、新らしく訂正せられしもの尠からず。金堂の高座間、須彌壇の金具に鎌倉の優秀なるミ室町の劣悪なるものを並べ存するが如き、觀月亭の兔毛通、手挾に室町以後の形式の存し、多寶塔に鎌倉の樹鬼斗ミ桃山の臺股ミを存し、戸金具、六葉、筐金物に於ても鎌倉ミ桃山ミの優劣を識別し得べきが如きこれ也。

二十四日は朝早く後村上帝の御座所たりし摩尼院を拜し、食堂跡なる寶物殿を觀る。國寶、其他の寺寶、傳正成着用の鎧、同後醍醐帝の御劍、阿育王鐘塔、絹本着色三尊像等優秀なるもの少からず。見學を畢りて後馬車を賃して觀心寺に向ひ、十時過着、先づ請うて兩朝歴代の宸翰、楠木文書を閱覽す。東寺長者の争ひ、朝用分の徵收、正行の祈願文、正儀の活動等ながら當時を思ひ浮ばしむるものあり。

次で堂塔の見學に移りては本堂の前面右下にある當山

鎮守訶利帝母天神社の社殿に於て象の舌ある木鼻、曲率の大なる破風、單調なる天人、鳥、花を刻せる方立、荒削りの大瓶束、抱き込みの少き若葉、木製の六葉、漬床模様の細くなれる桃山式の臺股等を見て眼のあたりその變遷を會得したり。本堂は名高き和様唐様折衷の特別保護建造物、斗ミ肘木ミの異なる截方を巧に並べたる手腕の鮮かさ、内外陣の輕快なる分ち方、鎌倉以後の特徴ある藻座、菱格子、棧唐戸、蝦虹梁、礎磬、柱等一ミして感興を惹かざるはあらず。之ミ比すれば建掛之塔の錯雜にして拙劣なる斗、肘木、尾極の組方の甚しく見劣りせらるゝ、是非もなき。

香を燒き丁字を啣んだ後度しく尊嚴ミ幽晦の御帳を開く、折目鋭き鬘ミ裾の渦ける衣紋、梳り上げたる髮、長き眉、一直線に靜觀したる上脛ミ、ゆるやかに弘みたる下脛、豊かなる其の頬、みづみづしく浮き上れる足、半伽の落ち付き、輪くつきたる右の腕ミ輪寶を獻けたる半開の右の掌の自然さ、頬杖つきたる右の一臂、すべてはこれ慈悲ミ無念ミ威容ミの表現なり、而も尙ほ靜かに音を

以て燃ゆる燈燭に映るは、衣紋、蓮座に衾け残りたる雲
細模様の複雜濃麗。こにかく此の逸品を拜し得たるを喜
ぶ、寺傳によれば大師の御作。

それより楠公首塚の前にて記念の撮影をなし檜尾陵を
参拜して長野を経て歸途に就けり。(徳重)

● 史學 研究會

例會 昨年十一月十日午後一時半より文學部第六教室
に於て開催、左の兩君の講演ありて午後四時散會。

天災ニ對策

法學士 本庄榮治郎君

普通天災の被害の大なるものを飢饉地震火災疫癘の四
者ごすべし。(一)飢饉に關する對策は既に奈良朝以前よ
り行はる。近世にありては享保飢饉の際には諸侯武士に
年賦金の貸與百姓に種子の給與、被害地に米穀の融通金
米の義捐、罹災民の爲の土木工事及米價調節策を行へり
天明天保の飢饉には是等對策以外在米の消費節約お救小
屋の建設代用食の奨励を實施せり。飢饉の豫防策として
は貯穀政策種々の組織の下に行はる。(二)近世の大震ご
稱すべきは慶長寛文寶永寛政弘化安政のそれなり。之が

對策は安政の時を顯著ごす。當時諸侯には任意賜暇拜借
金返還期日延期、士分には金員の支給、町家にはお救小
屋の設備及種々の施行をなし、暴利取締令運輸令等を發
布し、諸侯自らは市中の警備に任じ、復舊策ごしては政
府は普請の簡易邸内空地の存立等を命ぜり。(三)火災は
近世には明曆明和文政の三大火あり。明曆の折には江戸
諸侯の賜暇在國大名の出府延期許可、一般には假小屋の
造營金員の貸下をなし物價及賃金調節令を出せり。防火
政策ごしては道路の擴張火除地井土及用水桶の設備を整
へしめしが、吉宗の時瓦屋根の奨励放火防禦の爲の非人
風俗の改正町火消の完成等を行へり。(四)疫癘に就ての
對策は維新前は單に豫防法治療法の教示貧民の施療等の
範圍に止れり。云々

豊國廟

文學士 魚澄惣五郎君

廟は秀吉の死後慶長三年九月起工翌四年三月中旬落成
社殿僧坊八十四輪奐の美を盡せり。我國廟建築の嚆矢ご
なす。慶長六年家康は先極東門を取上げて竹生島に送り
しが、次いで社領の内二百石を没して根來智積院に與へ

たり。元和元年豊臣氏滅亡するや豊廟破壊の議を決して社僧梵舜に通達せり。此事は當時の浪人政策上より着手せしものゝ如し。斯くて社領は妙法院、智積院に分附せられ、徳善院の建物は文殊院に寄附せられ、梵鐘を智積院に拜殿胡摩所等は吉田に校倉等は佛殿に引渡され、器具を納めたる社殿を閉鎖し、門前の路次は妙法院の爲に塞がれ、元和二年には豊國廟の木材は聖靈院に送られ、先に家康に依りて安堵せられたる神宮寺は取上げられ、新豊國社の社家は改易の命を受けたり、元和三年には豊國廟の礎石を殆ど悉く取除き、其後元和五年神宮寺の地の妙法院に引渡さるゝに及んで豊國廟は全く廢滅せり。斯く極めて徐々に何等世の注意を惹く事なしに破壊の道程を辿りしは徳川氏の統治策の巧妙なるに因る。爾來豊國廟は世人より次第に閑却せられ、寶永の地圖には全く豊國廟を記載せざる迄に至れり。云々

總會 十一月廿四日午後一時より京京帝國大學々生集會場階上にて開催、左の講演あり。

一、獨逸史學の二大百年記念 文學博士 坂口 昂君

右講演の筆記は本號誌上に登載せり、次で評議員十名の改選の後

一、兩晋南北朝に於ける佛教の影響

文學博士 市村瓚次郎君

先づ序論として人類は環境の支配を離れて生存するこゝ能はざれば人類の歴史は環境の影響を被るこゝも多く環境は變遷を主とする時代を経ざし、固定を主とする場所を繕ざし、兩者の錯綜によりて成る環境には、絶對の變遷なく絶對の固定なきこゝより文化は共同生活に於ける知能の組織的表現にして物質的文化精神的文化、及び統制的文化の三あり、物質的文化を中心とする歴史が經濟史に、精神的文化を中心とする歴史が思想史にして統制的文化を中心とする歴史が政治史なり、文化も亦環境より影響を受く、絶對の變遷なく絶對の固定なし博士一流の見解を漢ミ唐ミの文化の比較を以て論證し、次に本論に入りて

佛教の支那傳來の初は西漢の末にあり。爾來(一)西域僧侶の支那入來、(二)寺院建立の増加、(三)佛教經典の

翻譯及び流行の事實によりて知らるゝ、兩晉南北朝間佛教が長足の發達をなしたる理由は(一)社會狀態の混亂、(二)個人信仰の空虛それに乘するに(三)佛教僧侶の布教宣傳の努力を以てしたるが爲めとし、其影響の精神文化の及べるは第一、言語殊に名詞の中に佛教關係の語、並びに關係ありと思はるゝ語多し。第二、一般の思想の上に靈魂不滅及び因果應報の佛教思想の影響を見。又特別の思想としても(1)清談及び老莊の解釋、殊に道教に於て著しく、(2)儒教に至つては甚しからずと説き、餘論として唐の時代に佛教の發達せる間にありて韓愈は佛教を度外視して儒教を原始狀態に戻さむとせしめるも奏效十分ならず訓詁註疏にて行詰れる儒教は、宋の時代に一大轉化を要すべき時機となれり。この時儒教哲學の創始者出で佛教の綿密なる考を儒教に應用しての二教を調和し儒教もこゝに至つて復活せり云々を結ばる。

午後五時半講演終了、席を階下に移して有志者晚餐會を開き談論風發興味深き時刻を惜しみて午後九時散會す當日は市村博士態東都より來講せられ、來會者亡慮百五

十名近來の盛會なりき。猶ほ評議員には(イロハ順)羽田亨、原勝郎、濱田耕作、小川琢治、内藤虎次郎、桑原隲藏、矢野仁一、坂口昂、喜田貞吉、三浦周行の諸氏當選就任せり。

● 讀 史 會

例會 昨年十一月一日午後六時半より牧學士の留學送別を兼ね學生集會場に於て開催、三浦教授、中村講師、江馬、牧、富森、中村、牧野、橋川、源、井川、佐古、加藤、勝峰、小橋、山本、徳重、後藤の諸君出席。左の講演あり。

一、大寶令田制の破壊について

文學士 牧 健二君
法學士

公地公民の制度は大化に確立し、大寶令に規定せられたるものにして、天皇ミ田地及び人民の間に他の支配者の介在者を許さぬ意なり。而もこは天皇が田地を任意に自由にするの意にあらず。國産の少きを憂へざるも民の産に差あるを病むが支那の王道思想なり。故に人口を基礎として給與し、且つ口分田は永久に賣買を禁ずるも、

園地宅地は處分を許したり。之を以て大寶令は強大なる主權の結果こいふべく、近世社會主義の土地國有論が私權發達の極點にあるこは趣を異にす。而して田令の精神を破壊したるものは墾田ニ莊園なり。その中墾田は公平均分主義に反對なる占有的のものにて田令の精神を根本的に破るものなるも、莊園はそれが發達して知(主權者の統治權)領(家の領地權)占(地主の所有權)ニ分化し、ついで領權の強大を致すに至りしは田令の内にその生ずべき機運の存したるものこいはざるべからず、云々。

一、失はれたる法制史料 文學博士 三浦 周行君
這般の東京大震災にては貴重の典籍の亡びしもの實に多し。その中近世の法制史料の纏れるものこしては第一に東京帝國大學圖書館なる舊幕府の評定所記録、寺社奉行記録を擧げざるべからずこて一々其内容を説明せられ、是等の中には幕府の各衙門の外舊諸藩の法制をも含めるこを指摘せられ、かゝる損失に當面しては圖書館藏書寫の珍書の取扱方に關する方針を根本的に改め從來の封鎖主義を撤して強めて其副本の複製を歡迎獎勵する

の要ありこ結ばる。

例會 十月廿六日午後六時半より學生集會場にて開會。三浦教授、天沼教授、西田助教、中村講師、富森、源、井川、橋川、小木、加藤、佐吉、勝峰、三浦、山本、小橋、徳重、後藤、伊藤の諸君出席、左の講演あり。

一、清涼寺の釋迦如來について 源 豐宗君

從來此佛像は三國傳來と稱し、其臺座の裏に唐國台州開元寺僧保寧の銘あるも、そは少くも百年後に書き入れたるものこ斷じ、且つその系統につきては、ガンダラ式、グプタ式、グプタ式の支那化したるもの等の三説あるも何れも正鵠に當るものにあらずこて、その流水狀をなす衣紋ニ組紐狀の頭髮より推論し種々の系統の圖像を示して、ガンダラ式グプタ式が西域に入りこれが混合して西域化したるものにして、鎌倉の極樂寺、仙臺龍華寺、奈良の唐招提寺のそれ等三同系統のものなりこ結ばる。

一、鞍馬寺の燈籠について 橋 川正君

先づ拓本によつて大日本金石史の誤謬を正し、勸進者

の名を記すに出家男十二人女二人在家男十九人女十一人計四十四人ある類は鎌倉時代の風習なること、眞阿彌陀佛といふ如く阿彌陀佛號を用ひることは俊乗坊に初りしこと、及び此の研究より延いて善光寺の大勸進にある武田信玄が鞍馬寺明法坊に宛てし返事を發見し、その内に虎の巻の法勤行券卷數云々の語あることを語らる。

例會 十一月十六日午後六時より古田學士の東北大學赴任の送別を兼ね學生集會場にて開會、三浦教授、西田助教授、中村講師、古田、富森、中村、源、牧野、小木加藤、勝峰、三浦、山本、小橋、徳重、後藤、伊藤、岡本の諸君出席。先づ法學部に來講中の中田東大法學部教授の講話を聴けり。

一、夫權の原型 法學博士 中田 薫君

夫權の原型は比較法制史上の興味ある問題なり、ローマ、ゲルマニヤ、印度の法律にて妻は夫の所有物なりき現今も劣等民族の間には此の風あり、而して此の妻が財たる性質は一轉して死者分の一となり、從て妻を夫死すれば共に葬り又は燒く風ありき。之が再び轉じては遺産

の一部となり、今尙劣等民族間には弟又は子の相続分たる所あり、而して此の風は妻より出でたる副産物即ち子にも及ぶことありて、妻が結婚前に受けし子、夫の死後生みし子も夫の所有となり相續となる。かくの如く夫權の原型は物權なるが、之が對人權に變じ更に夫權の消滅に至るもの即法制進化の道程なりとす、云々。

一、淨土門の正統論 文學士 富森 大梁君

宗派の分たる原因は教祖の人格、説教の形式、門下生の解釋、性向、教養、教義の形式、當時の社會的事情、政治的事情、經濟的關係等にありて、法然及其門下を解剖し淨土門の正統論は主として選擇集の傳授に係ることを、而して、其最も盛になりしは、法然の寂後百年内外の時期にして、九卷傳は西山派正統論四十八卷は鎮西派正統論拾遺古徳傳は眞宗の正統論と目すべきものなり。云々、

第十四回創立記念大會 十二月一日正午より學生集會場にて公開左の諸講演の外、三浦博士、天沼博士、西田學士が歐米より將來せられたる日本史に關する、史料歐洲古文書原本影寫及び歐米の古文書館の寫眞印度及び

錫蘭の建築寫眞等を陳列して展觀せしに聽講者亡慮五百名、空前の盛況を呈せり。先づ學生後藤君の開會の辭あつて直に第一部の講演を開始せり。

一、幕末に於ける諸藩の富強策について

牧野信之助君

幕末四五十年間の思想界の急激なる變化は外艦渡來によれき亦二百餘年間蘊釀し來れる學藝の力に經濟上の變化に基く此時に際して諸藩の政治家は急に光明の世界に出でたる爲に眩惑して狼狽せしが、巧妙なる時代の指導者は、よく藩論を一定して、西洋の文明を吸收し以て自藩を富強にするを努めたりとて越前大野藩の採れる政策を述べ内山良休は從來の勤儉策のみによらずして産業立國の策をまり、天保十三年より八年間に之を成就し、學校を興し、洋學を奨勵して儒魂洋才を尊び、其弟隆佐をして砲術訓練を司らはしめ、士農の差別打破を示し、種痘を行ひ、病院を建て、銅、漆、生糸等の工業を奨勵し、北海道に植民地を開き、商船を作り、金貨を貯へ、岐阜、名古屋大阪等に藏屋敷を設けて商工を盛にしたり

しこみを述べらる。

一、地震史の一考察

文學士 今村 孝三君

大日本地震史料に擧げたる允恭天皇五年より明治元年まで二千回について地震の人心に及せる影響は割合に小なること、地震記録の正確にあらざること、地震の原因に對する時代の思想、地震に依る改元の事等を述べらる

一、淨土教と特殊民

文學博士 喜田 貞吉君

太古以來肉食をなせる我國民が殺生、肉食を罪せしは佛教の影響なり。肉食者は餌取濫僧も云へり。延喜の頃は天下の民三分の二は濫僧なりき。非人にして山人、海人、坂の者、河原者もその類なりとす。彼等は佛の濟度せざる所のものなりも、奈良朝頃より既に教化を加へし僧あり。淨土教はすべて三部經を所依とするが、大經の四十八願中の第十八願に十方衆生を濟度するの誓ありこれによつて空也、源信、沙彌教信、法然、親鸞、一遍、良忍等の諸高德は穢多非人迄教化せしが、而も尙穢の熟せざるに外部の壓迫によりて親鸞に至りて初めて完全に之を遂行せり。國史を見るに穢多非人共に經濟上

又は政治上の劣敗者にして何等本質的に區別あるにあらず幾度も復歸し來れり。只徳川氏の保守政策の久しかりため傳襲的に差別待遇を受けしのみ。我々はかゝる無意味の差別を撤去せざるべからず、云々。

終りて十分間の休憩中會員の記念撮をなし次に第二部の講演に移れり。

一、歐米人の日本研究 文學士 西田直二郎君

歐米人の日本研究は五期に分つことを得、江戸幕府鎖國以前の日本は、マルコポーロの紹介によりて黄金、眞珠、香料、食料の充満せる樂園と觀じたる夢幻的、超地理的の境地にあり。鎖國後幕末迄は専ら蘭人によりて貿易に利ある強力にして禮讓ある國と見られ、精神的文化的理想國視せられしものにてガコンの「強力なる日本の眞相」(一六四八年)ケンプエルの「日本史」をその代表作とす。次は維新を中心として政治的意味を有するものなれば、徒らに讚美をせずして支那經營の適當なる足場とせり。モンブランの「日本は如何なる國乎」を代表作とす。次は日露戦争を中心とし、驚異の眼を以て研究せられ、

よくトビツクとして用ひられたり。次は世界大戰以後にして、識者民衆を通じて探求せざるべからずと考へられ居れり。而も此期は惡評の多き時代なりとす。フロレンツの「日本及び獨逸」には、日本の文明は模倣のみにして創作なしといひ、「日本は如何なる國か」には日本人と獨逸人には類似點なし、彼等は知識的なるも世界文明に貢獻せず、我々が日本人より與へらるゝものは裝飾と美術品のみといへり。かく歐米人の日本研究が實際的批判的となりたるは喜ぶべきことなり。但し歐米にては未だ一般の民衆は勿論識者にも知らるゝ處甚だ少く今尙ほ岡倉覺三氏の「茶の歴史」小雲八雲の諸著等愛讀せらるゝのみ學者は須く我國情及文化を彼等に紹介すべき也、云々。

一、印度及錫蘭の佛教建築について 工學博士 天沼 俊一君

印度の佛蹟は塔婆と僧房と佛殿とより成り、ボンベイ附近、サンチ附近ガンダラ地方、バナレス附近、マドラス附近、セイロンにあり。されど回教の侵入と共に破壊せられ 今の僧のゐるはブダガヤと錫蘭のみなり。其中

最も興味あるは塔にして山腹の砂岩の露出せる所を穿ちて作る。その形が支那に入りて笠を數多く生じ日本へ入りて多寶塔となり三重五重七重等の塔となり、僧房は大方佛殿を圍みて四角の長屋をなし、中に井戸あり。我東大寺のものは之に近し。伊太利セルトゾのものに殆ど類す。佛殿は岩を掘ぬけるもの、外残り居らず。其プランは基督教寺院初期のものに似たり。現今印度の佛蹟は殘れるもの少きも、存するものは政府よりよく保護を講じ居れり、云々。

一、歐米の古文書館

文學博士 三浦 周行君

本誌に掲載せられたれば略す。

當日陳列品の重なるものを舉ぐれば明左の如し

耶蘇教會師父佛人ブリエ氏構圖日本國圖(パリ出版)、

ハーグ古文書館藏大阪城圖油畫寫眞、ヰネチア古文書

館藏大友氏使節伊東滿所のヰネチア共和國ドーゼに贈れる謝狀影寫、サンソビノ氏ヰネチア誌(一六六三年

ヰネチア出版) 伊人ベルシエ氏日本遣使考、東洋耶蘇教

會報告(一五七四年コロニエ出版)エズイット教會日本及

支那布教々本(一五八六年ローマ出版)蘭人モンタヌス

氏著日本遣使記(一六六九年阿姆斯特ダム出版)同佛

譯、同英譯、佛人クラッセ氏著日本西教史(一六八九

年パリ出版)同英譯、同獨譯、日本殉教者の一生ミ虐

殺(一七二四年ヰネチア出版)佛人マルナス氏著、日本

耶蘇教の再興、一三〇六年特許狀、一五三四年遺言狀

一七二〇年結婚契約書、一七一九年莊園免許狀、一七

六一年莊教圖、蘭人ミュレル、フアイト、フレン三氏

共著古文書分類及叙述概論、英人ジョンソン、ゼンキ

ンソニ氏共著英吉利裁判文書筆蹟研究、マツラ出土彫

刻殘闕、バートリプトラ所在石柱斷片、タキシラに於

ける希臘印度式建築の飾漆喰等

午後七時三十分講演を終つて席を階下に移し會員の晚餐

會を催す。三浦教授、天沼教授、西田助教、中村講師

清原、江馬、今村、富森、中村學士、牧野、源、森下、

島田、勝峰、加藤、三浦、徳重、山本、小橋、後藤、伊

藤、岡本、小木諸君出席、歡談を盡して十時散會せり。

支那學會

例會 昨年十月十八日午後六時より文學部第六教室にて開催、左の講演あり。

一、幹退之の讀墨子を讀みて

文學士 崎山 宗秀君

一、周易の由來を論ず

文學博士 内藤虎次郎君

例會 同十一月廿九日、同刻同室にて開催す

一、抱朴子の漢過篇につきて

文學士 岡崎 文夫君

一、古水神傳説

文學博士 鈴木 虎雄君

大會 昨年十二月九日午後一時より京都帝國大學々生集會場階上にて開催左の講演あり。

一、目蓮救母行孝戲文に就て

文學士 倉石武四郎君

本書は上中下三冊一百二幕より成る佛説盂蘭盆經、佛説報恩奉養經より取材し、明の萬曆頃に新安の鄭之珍高山人の作に係るものも考へらるゝ戲文なるが、從來の著録に題目のみ見えて、未だ本文の斯學研究家に熟知せられざるものなり。内容には西游記、白兔記の影響著

しく蓋し傳奇臺考所見の龍華會、戲考所載の目蓮救母劇の先驅をなすもの、其の登場人物に夫、占、小等稀觀のもの多く、又作者の經歷も一切不明なるものなり、て種種推定説を提出せり。

一、易の共存同濟主義と孔子

文學士 湯淺 廉孫君

主として易の旁通説を評述し、これ易の作者に共存同濟の意志ありし爲ならむと推定し、孔子の仁との關係を論ぜり。

一、歴史上より見たる南支那の開發

文學博士 桑原 隲藏君

南北朝に於て東晋の出現により南支那の開發せられしことより張籍の詩に北人避胡多在南。南人至今能晉語。とあれば唐代に建康を中心として相當開發せられしを知る。然れども唐の獨孤及の福州新學碑銘に徴すれば福建地方は唐代にも尙ほ儒學行はれず、福建の門閥林、黃、陳、鄭氏等所謂八姓も晋南渡と共に此の地に移住せしものなるも、唐の中期迄は福建の開發未だ充分ならず、然

るに韓退之の潮州、柳宗之の永州、柳州に貶謫せらるる
なき政治上の罪人の此の地方に多く来るや、文化開發に
大なる寄與をなすに共に、宋の南渡に伴ひて中國人の南
遷する者愈々多く、遂に楊時、李侗、朱熹、の如き國學
も起り、明情を通して學者文人藝術家江浙に輩出、其の
人口も南方愈々稠密、遂に中國の文化は南支那に其の興
華を開くに至れり云々。

一、地震に關する神話及傳説

理學博士 小川 琢治君

我が國の地震神として大己尊等を擧げ得べきことか比
較研究上より論じ、支那に於ける地震に關する傳説とし
て楚辭天問篇の康回、列子湯問篇の共工氏、滄の陸地を
支へる傳説、山海經の禺彊、の話より周の幽王二年西周
三川の地震が周の東遷を促せしこと、並に明の嘉靖卅四
年の山西、陝西、河南の大震に八十三萬餘人の死者あり
しことを詳細に論述せり。

右終了して午後六時より階下別室にて有志晚餐會を開
き午後九時散會せり、來會者亡慮一百餘名近來の盛會な

りき。

● 第九回大藏會

昨年十一月十一日、京都佛教各宗學校聯合會の主催に
係る第九回大藏會が大谷大學に於て開催された。會は展
觀と講演の二部より成つたが、展觀は第一門を淨土眞宗
和讃の部となし、第二門を東寺觀智院藏本の部とした。

第一門に於ては大谷派本願寺、願泉寺、本誓寺、光照寺
柴谷善太郎氏等の所藏なる親鸞聖人自筆の太子和讃斷簡
を初めとして、諸種の刊寫本の和讃を殆んど悉く網羅し
た。中にも文保二年覺如書寫の太子和讃、享徳二年蓮如
書寫の和讃二帖等は稀觀すべきものである。なほ第一
門の番外として大谷派本願寺の康永二年、貞和二年の本
願寺聖人繪を展觀に供したことは大いに衆目を惹き、美
術風俗の研究者の渴を醫したやうであつた。第二門は前
年展觀した觀智院藏本の殘部であるが、歴史研究上將又
書史學上注意すべきものが尠くなかつた。今その一二を
擧げるならば、應徳三年に寫した禪林寺入藏目錄、長承
二年書寫の依憑天台集、高野版を轉寫した釋論通玄鈔（

奥に高麗初彫本の壽昌五年の文字あり、建長七年の七大寺日記延徳三年の地藏菩薩繪詞、奉渡日本國僧重源の端書ある般若心經疏等二帖、建久四年の高野山奥院差圖、應安七年の金剛峯寺緣起、應永版の三國佛法傳通緣起等何れも研究校勘の好資料である。なほ第二門に於て天平勝寶六年の起信論や有名な類聚名義抄を陳列して光彩を添へる所があつた。又講演には新村博士の典籍の災厄に就て日下無倫氏の親鸞聖人の和讃についてがあつた。

●朝鮮史講座の發行

朝鮮總督府の修史事業に従事し若しくは朝鮮史に興味を有する人々に依りて組織せられ、黑板、三浦、篠田、關野諸博士を顧問とせる朝鮮史學會にては昨年九月より毎月一回講義録「朝鮮史講座」を發行することゝなれり。今其第三號迄の内容を擧ぐれば。

- 一、一般史(上世)小田省吾(中世)荻山秀雄(近世)瀨野馬熊(最近世)杉本正介、分類史(民族史)稻葉岩吉(財政史)麻生武龜(美術史)關野貞(日鮮關係史)植原昌三(滿鮮關係史)稻葉岩吉(中央竝地方制度沿革史)麻生武龜(教

育制度史)小田省吾(學藝史)洪憲(佛敎史)李能和(語學史)小倉進平、特別講義(舊社會事情)加藤瀧覺(國文、史吐、俗證、造字、俗音、借調字)鮎貝房之進(海流と民族)大原利武(朝鮮金石文)葛城末治(高麗版大藏經)菅野銀八(朝鮮及滿洲の國號系統)大原利武(國書解題)荻山秀雄、附録(歷代王家系譜)大原利武(朝鮮史便覽)菅野銀八

にして朝鮮史の各方面に互り記述の通俗と正確とを期し且つ毎卷頭に有益なる圖版を挿入し、別に質疑應答の欄を設くる等用意周到にして苟くも半島史の知識を得んことをするものには必讀の良書なり猶ほ同講座は滿一年を以て完了の筈にて毎卷約二百五頁、代價各壹圓、入會希望者は三箇月以上の購讀料を添へて京城長谷川町七六同會事務所(振替口座京城二二、一一二番)に申込むべし。

會 報

●寄贈交換圖書

小書叢叢刊 第一集

史學雜誌 三四の九・一〇

歴史地理 四二の三

龍谷大學論叢 二五一・二五二

經濟論叢 一七の四・五・六

朝鮮史講座 第一・二・三號

國學院雜誌 二九の二〇・二二

史學會々報 第三號

伊豫史談 三四・三五

●會 員 動 靜

□入 會

大津市三井寺境内

朝鮮京城府外延禧專門學校

京都市麩屋町通三條上ル

(右紹介者、三浦周行)

兵庫縣式部郡深江村

(右紹介者、江馬務)

京都市武者小路通小川東

丁 錫 田

史 學 會

日本歴史地理學會

龍谷大學論叢社

京大經濟學會

朝鮮史學會

國學院大學

神宮皇學館史學會

伊豫史談會

(右紹介者、富田仙助)

高知市

東京市小石川區林町二六

(右紹介者、島田貞彦)

東京市小石川區林町二二〇

(右紹介者、今村孝三)

□退 會

長尾 景治 丹波史談會 長坂 金雄 高巢庄太郎

内藤 智秀 馬場是一郎 村上 秀一 五條 秀麿

□死 亡

鎌田 正憲 高橋 邦枝 田中萃一郎 下川 潮

會 費 領 收

大正十年度

今井 貞臣

大正十一年度

横 山 ソ ノ

武岡 豐太 口入田覺了 羽栗 賢孝 須甲 理喜

千 宗 守

塚本 善隆

津田 三郎 名越那珂次郎 荻山 秀雄 今井 貞臣

大正十二年度

板澤 武雄 若月 尠夫 橋村 博 山鹿誠之助
 源 豐宗 小川 琢治 龜井 高孝 津田在右吉
 村上 秀一 松 島 惇 磯野 實惠 清水 福市
 今井登志喜 鳥羽 正雄 付岡 勝也 萩野 由之
 植木直一郎 末松 吉次 足利 衍述 岩松 五良
 古曾部 紀 中江喬三(下半年期) 蘆田 伊人
 內藤 智秀 龍 齋 賀古 鶴所 渡邊 世祐
 丹羽 正義 河鱈 實英 內田 寬一 八代 國治
 萩野仲三郎 川上 多助 三上 參次 佐崎 重暉
 木内重四郎 淺野 長武 柳田 國男 本多辰次郎
 入江 相政 岩 生 成(下半年期) 松平 乘統
 圓谷 弘 友枝 照雄 小野 玄妙 酒井 忠一
 佐々木信綱 島津家編輯所齋藤 阿具 近衛 文麿
 藤田 豊八 渡部多仲(下半年期) 丸山源八(同上)
 上林敬次郎 小川劔三郎 香取 秀真 大森金五郎
 西尾銜次郎 幣原 坦 白石 正邦 和田 清
 芝 葛盛 德富猪一郎(貳圓貳拾五錢) 阿川 重郎

狩野 直喜 藤代 頑輔 桑原 隆藏 内藤虎次郎
 藤井 乙男 藤井健次郎 高瀬武次郎 濱田 耕作
 鈴木 虎雄 吉澤 義則 米田庄太郎 羽田 亨
 岩崎 孫人 齋藤 俊次 堀 常次郎 荒木寅三郎
 新堂 順明 長澤 徳玄 細田 禮行 富田 熊作
 小木 津 森田 博三 岡部保次郎 田所 市太
 小野 武夫 清水 泰次 堀 維孝 高橋 謙
 中川 義澄 脇屋 僞謙 佐野 秀俊 北里 闌
 飯島 喜廣 左藤 義詮 小津龍之助 今村 孝三
 中川 泉三 吉川貞次郎 下田 禮佐 岡村 民二
 八木繁四郎 桑原 親通 廣瀬治兵衛 山田安次郎
 神谷哲太郎 山下 四郎 林 森太郎 武岡 豊太
 田中吉太郎 青地重治郎 岡田 播陽 森下 眞男
 關 信太郎 藤森 勝郎 千宗 守 高橋 俊乘
 徳重 淺雄 金子 光介 口入田覺了 芳野 廉三
 浦上 宗衛 下戸前繁松 博多 久吉 寺田 貞次
 上原菊之助 丹波史談會 平山 政造 江馬 務
 龍谷大學佛教學教室 季 秀一 青山 重鑒

勅使河原健之助 阪本廣太郎 島 文次郎

重松 俊章 佐藤 小吉 笹川新太郎 關 保之助

松浦 丘園 西村喜一郎 丹羽 圭介 蜷川 第一

能勢 丑三 平山 勘次 大橋德四郎 上野 一也

岡 茂政 三輪菊三 森 虎雄 森田清之助

牧野 純一 水木要太郎 前川英三郎 森口奈良吉

南坊城良興 村治 郎 森野保次郎 諸鹿 典雄

藤田 穠三 藤井準一郎 古田 良一 舟木益五郎

藤塚 鄰 由比 質 上原精一郎 内田 清長

湯淺 長次 口石 敬義 木下 寂善 山崎 藤吉

山口 浩義 横地 得三 山田新一郎 山本 行範

山本 元 谷井 濟一 山田 文昭 渡邊孫右兵衛

若山善三郎 近重 眞澄 上田 恭輔 江見 清風

行德 曄受 碓井小三郎 魚澄惣五郎 坪井 忠彦

本山 久平 増山 重光 本山 彦一 森下 博

三井甲之助 宮崎甲一郎 宮城 信雅 森田 實

吉田 寅藏 吉村宇一郎 米田 恭禮 杉浦 隆次

千家 尊統 佐々木彌四郎 曾我 豊吉 佐々木切成

杉本 正介 篠田 周之 藤井治左兵衛 福惠 道場

堀 正二 羽栗 賢孝 福原潛次郎 堀場 義馨

日下 無倫 本田 義英 藤田 精一 日高 重孝

本庄榮次郎 志田 義秀 三上 嘉一 高橋 勝一

伊豫史談會 木宮 泰彦 住田 智見 上田 確郎

須甲 理喜 津田 三郎 江藤 徹英 坂倉篤太郎

杉村勇次郎 佐木 誠義 雪山 俊夫 野田 貞雄

高杉 權藏 匹田 直 栗原 助作 稻葉 倉吉

澁江小摩策 森 彦太郎 大高 常丸 五條 秀麿

大阪金太郎 濱田 廉 古谷 繼隆 安部 立郎

長尾 景治 牧山 清 鈴木 登 芝 文雄

柏原 昌三 鮎貝房之進 長谷外余男 名越那珂次郎

仁科 真人 布川 豊 中目 覺 内藤 萬輔

西田與四郎 中山平次郎 中島 俊司 中山再次郎

内藤 馬藏 吉尾 長吉 上村 治八 鹿島圓次郎

古賀 德義 神浦万十郎 栗田 元次 河村 實

加藤 喜平 河原喜太郎 菊池謙二郎 河島松太郎

加納川謙一 川上 孤山 河田 嗣郎 神田喜一郎

黑田俊之亮 菊池 仁齡 清岡 猛虎 龜崎光次郎
北島 貞顯 有高 巖 小島 捨市 小島 祐馬

田中作次郎 鳥羽 重節 鳥山 喜一 松野 道宗
大正十三年度 龜井 高孝 柴田 喜八 柳田 國男 渡部 多仲

小山 源次 荻山 秀雄 大谷 德馬 岡崎 文夫
小田幹次郎 小田 省吾 尾崎 庄助 岡久麿三郎
鴛湖 一 大倉 進平 大村 正之 大野繼之進

丸山源八(上半期) 小川劍三郎 香取 秀真
小水 津 今井貞臣(貳圓)

大谷大學圖書館 大阪朝日京都支局 大屋 德藏

大正十四年度

大島 五郎 大島 徹水 今井 貞臣 市村 與市

柳田 國男

稻葉 圓城 井川 定慶 伊藤 祐晃 岩間 德也

今井 貫一 今井 真樹 市川 敏雄 石原 定孝

猪熊 信男 岩井 武俊 石濱純太郎 入江 義博

猪熊 淺磨 出雲路通次郎 建部 遯吾 鳥羽 耕治

高橋 欣二 富森 大梁 財部 靜治 玉置由次郎

谷岡安三郎 高林 誠一 玉井 是博 宮崎 市定

佐古 慶三 塚本 善隆 岸本 繁造 高木 善人

玉泉 大梁 辰馬 悅藏 谷本 富 武田 五一

田邊 一郎 辻村周次郎 高巢庄太郎 高木 利太

田中 俊清 鳥飼 生駒 高尾 常磐 津金 史香

竹島 寛 時野谷常三郎 松野仁左衛門 塚本 常雄